

男女共同参画のとりくみ（ランチョンセミナー企画より）

宮川 さとみ（男女共同参画担当幹事）

7月24日の日本RNA学会総会において、昨年に引き続き、男女共同参画のランチョンセミナーを開催いたしました。昨年のセミナー後のアンケート結果より、「女性に限定しない若手支援や、研究者のキャリアパスやリーダーの育成」についての話題を取り上げてほしい、という意見が多かったことから、今年のランチョンセミナーでは、最近あらたなスタート切った3人の方に、ご自分がこれまで歩んでこられた山あり谷ありの研究人生についてお話ししていただきました。三者三様の楽しい、そしてうなずけるお話を聞かせていただくことができました。トークの内容を以下に抜粋させていただきます。

まず、最初にお話しいただいたのは、昨年の10月に九大工学部より富山大学理学部化学科の教授に転任されました**井川善也**さんです。ご自分がPIになられたときのきっかけや視点、アドバイスなどをお話ししてくださいました。

まず、PIに応募するときには、「選ばれる」立場にあるわけですが、PI（特にここでは教授）になれば、（学科等）所属する組織の今後の教員を「選ぶ」立場としての責任が生じます。これが職位の役割として以前と最も異なるところです。また、キャリアとしては、大学なのか、研究所なのかで大きく違います。大学ではやはり教育の経験が考慮されます。大学では指導者・教育者としての視点は重要で、特に研究の「ワクワク感」をいかに学生さんに伝えるかは非常に大事だと思います。また、独立して研究していくには、研究資金をいかに獲得するかは、やはり重要です。研究面で独立した時期（准教授時代）に「さきがけ」に採択されたことにより、資金に加えて人との交流やつながりができたことは、非常にプラスになりました。また、チームで発表される成果の中で自分の仕事（における主導性）を知ってもらうためには、学会での発表や質問をすることによって、記憶に残ってもらえるようにすることも大事です。可能であれば、研究に複数の学会や学術分野で発表できる学際性を付与できれば（井川さんにおいては化学と生命科学の両方の分野）キャリアアップの際に応募できる選択肢が増すと思います。また、ライフプランとの両立（3人の娘さんのお父さんですが、現在人生初の単身赴任中です）も人生においては重要です。そして、最後のアドバイスは「YMW」（やってみなきゃわからない）。これは「さきがけ」領域アドバイザーの先生方がいつもおっしゃっていた言葉です。迷ったらやってみる。チャンスがあったらやり続ける。そうすれば、おのずと道は開けてくるといいます。

次にお話しいただいたのは、今年の4月より近畿大学農学部バイオサイエンス学科の教授に就任されました**佐渡敬**さんです。「オレは人にアドバイスするような人間じゃないから勘弁してよ～」と、ランチョンセミナーを固辞していた佐渡さんですが、留学中の経験と、ポスドクをする際のキーポイントをお話ししてくださいました。

学位取得後半年してからイギリスのケンブリッジ大学で2年間、その後アメリカのマサチューセッツ総合病院で1年半ポスドクをしました。留学中はこれまでの研究人生の中で最も充実した時間でした。アメリカで始めたXistのアンチセンスRNAの研究は、同じような研究の論文をよその研究室に先に出されてしまいました。しかし、そこであきらめずに自分なりの研究を続けて、最終的には論文にすることができました。先を越されても、めげずに自分の成果を形にしていくのが大事だと思います。同じような考えを思いついて、似たような研究をしている人は案外たくさんいるものです。競争の激しい分野で先に論文を出されてしまっても、そこでがっかりするのではなく、自分の成果に基づいて論文をまとめ、続報を出すことが大事です。そうすることによって、その分野の国内外の研究者に自分の存在をみとめてもらえ、自分の分野を作り上げていけるといいます。

博士取得後のポスドクをどこでするかは重要です。分野を大きく変えるチャンスです。ビッグラボで大きな仕事を狙うのも悪くはないですが、将来的に続けていきたいテーマがあれば、その分野のビッグショットのラボではなく、分野が多少かぶるけど自分ではやらないというボスのところにアイデアを持って行ってやらせてもらうのがいい。そして、外国に行くのはやっぱりいいと思います。

最後に、研究者はやっぱり大変です。研究にはなかなか終わりがなく、研究をするだけでなくわかりやすく伝え